

C1：男子体操競技

男子審判長 森 直樹

令和5年度全国高等学校総合体育大会体操競技大会兼全国高体連体操専門部70周年記念大会が8月3日から5日まで北海道札幌市の北海きたえーる（北海道立総合体育センター）において開催されました。本年5月より新型コロナウイルス感染症の位置づけが5類感染症となったことで感染対策が緩和され、今大会は保護者だけでなく一般観客等の観戦が認められ、久しぶりに賑やかな競技会となりました。審判員の中には残念ながら体調不良者が出て競技会直前に交代する事態こそ起きましたが、選手においてはエントリーされた259名全員が出場することができたことは大変嬉しく思っています。

監督会議では適用規則の確認や、マナー面での注意事項についてお話させていただきました。適用規則は2022年版高等学校男子適用規則であり、ここに記載のないものはすべて2022年版採点規則（一般規則）であることと、先日公開されたFIG NEWSLETTERS#3を適用する旨を伝えました。この情報はルールの変更ではなく、減点項目や減点方法の明文化が主な内容となっておりますが、成長過程の高校生の競技会であることを念頭に置きながら柔軟に対応することとしました。また、今大会は静止が求められる技においては厳密に採点をするのを伝えました。これは、これまでの高校総体の審判報告の中で、静止技において静止時間が不足する選手の多さに対して懸念を抱く声が多かったことと、2日間の本会場練習を見た際に私自身も同様に感じたためでした。マナー面においては、体操競技情報30号の記載内容でもある、器械の準備は3名までであることと、前の選手の演技終了を待たずにマットに上がって準備をするといったことがないよう、再確認をさせていただきました。Dスコアに対する問合せは、例年通りD1審判に直接行い、意見の相違があった場合は審判長に問い合わせることができることとしました。また、問合せはDスコアの他にもニュートラルディダクションについても認めることも合わせて伝えました。

審判会議および審判研修では、高等学校適用規則の内容を全体で共有し、理解を深めました。その後種目ごとに分かれて、出場する全ての選手を公平公正に採点すべく、D1審判を中心に今大会における採点の方向性や減点内容について共通理解を図りました。

競技会においては、予選と決勝を通して、演技とその得点を見つめる限り、一都道府県や一所属に偏った採点が行われたり、競技の日程や時間によって得点の基準が変わったりするなどといった問題はなく、全ての審判員が一貫して公平公正に採点することができていたと感じました。

Dスコアに対する質問は6種目を通して予選で23件、決勝で6件ありましたが、その約半数は主に技の認定に関する確認であり、D1審判の説明においてご納得いただきました。残りの半数は監督の計算や認識の誤りによるものであり、採点規則の共通理解がなされていない実態を知ることができたと同時に、今後の改善策の必要性を感じました。審判長への問合せ（インクワイアリー）は全日程を通して予選での1件のみでありました。内容は技の認定基準に関することでしたが、私とD審判において同一の見解であったため得点の変更は行いませんでした。

監督会議にて説明させていただいた静止時間の不足においては、残念ながらまだ多くの選手が静止技における静止時間への意識が薄いと感じました。特に平行棒における脚前拳からの伸腕屈身力倒立（伸肘倒立）や後ろ振り倒立の際の静止時間の不足が多く見受けられ、技の不認定や大欠点を被るかたちとなってしまいました。今一度日々の練習の中で静止に関する意識を高めていただきたいと思います。また、マナー・モラル面においては、全体的にはよく守られていると感じました。しかし、強いて言えば、競技中に大会が準備したタンマボックス周辺に、所属が準備したタンマを入れる容器やハチミツ等のボトル、霧吹き、雑巾などが散乱していたことが気になりました。マット上だけでなく、会場全体をできる限りきれいに使おうとする意識を持つ選手が増えると良いと感じました。

最後になりますが、大会実行委員会、高体連関係役員、北海道体操連盟や補助役員、その他大会に携われました多くの皆さまのお陰により素晴らしい大会となりましたこと、心より感謝申し上げます。

1. 採点上の打ち合わせ事項

- ・2022年版高等学校男子適用規則の確認
- ・雄大なアクロバットの跳躍技において、先取りのある頭や腰の位置の高い着地を評価する。
- ・宙返りひねり技でのゆがみのない正確な実施を評価する。
- ・グループ I の旋回技や力静止技、柔軟技において丁寧で美しさを表現する捌きを評価する。
- ・静止時間不足やアクロバット技の前の2秒以上の停止を厳密に採点する。

2. 採点上起こった事項とその処理

■技の認定について

- ・宙返りの連続において、2つ目の技で大欠点と判定した実施は組合せ加点なしとした。
- ・ひねり不足については厳密に判定し、90°を超える不足の場合は低い難度で認定した。
- ・前方伸身宙返り(ひねり)で腰がまがり、明確な伸身局面が見られない実施は屈身(A 難度)と判定した。
- ・静止技において明らかに静止が見られない実施は不認定とした。

■E スコアについて

- ・雄大で高さのある高難度の宙返り技で着地姿勢の高い実施を評価した。
- ・静止技において、正しい姿勢からの逸脱や静止時間を厳密に判定した。
- ・アクロバット技の前の停止時間を厳密に判定した。
- ・宙返りひねり技でのひねり不足やゆがみのみられた実施において相応の減点をした。

3. その他特記事項・意見・感想等

D スコアの最高は予選・決勝とも 5.9 (昨年度 : 5.8) であり、後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり (F 難度) など高難度な技を取り入れた演技構成だった。

E スコアに目を向けると、演技開始から終末技まで丁寧に実施する選手とそうでない選手との差を大きく感じた。最高は予選 8.900、決勝 9.033 であり、高い E スコアを獲得した選手は宙返りひねり技での正確な実施や、頭や腰の位置が高い着地が評価された。ゆかは難度の高低に関わらず、1 つの宙返り技で多くの減点ポイント (高さ・脚の開き・姿勢・ひねり不足・着地準備・着地など) があるため、例え転倒がない演技であっても美しい技捌きでなければ高い E スコアは獲得できない。また、宙返り技は丁寧に実施できていても、前後 (左右) 開脚座 (瞬時静止) で膝やつま先がまがっていたり、開脚座から伸腕屈身力倒立で肘やつま先がまがっていたりと、グループ I の技で余分な減点をされる選手も散見された。

終末技において着地を止めたと判定した実施は、43 演技 (17.0%)、決勝 15 演技 (17.6%) だった。3 月末に行われた全国選抜大会では終末技において着地を止めたと判定した実施は 3 演技 (5.2%) だったことを考えると、選手・監督の意識の高さが現れた結果となった。着地の重要性から、高校適用規則では終末技の着地加点を設定している。今後の大会でも今大会同様、終末技で着地を止める選手が増えることを期待する。

2 回宙返り技を実施しないことによる ND0.1 となった演技は予選 74 演技で 29.2% (昨年度 : 30%)、決勝 5 演技で 5.9% (昨年度 : 6%) で、昨年度から大きな変化は見られなかった。

2022 年版採点規則 (2022 年版高等学校男子適用規則) も 2 年目を迎え、選手のレベルに応じた目指すべき演技構成も見えてきている。その中で、高難度な技を取り入れる選手や、美しい体操を表現する選手、他の選手と違う宙返りの高さを出す選手など、将来世界で活躍することを見据えて指導者と共に日々努力していることがうかがえた。今後も技術の向上と美しい実施に加え、安定した演技を目指していただきたい。

1 採点上の打ち合わせ事項

- ・2022年版高等学校男子適用規則の確認。
- ・腰の位置が高く、雄大かつスピード感のある旋回を評価する。
- ・演技全体として、最初の旋回から最後の旋回まで質の変わらない実施を評価する。
- ・旋回の足先が上下することなく、安定した実施を評価する。
- ・倒立を経過する技では、停滞や力の使用がなくスムーズに持ち込む捌きを評価する。

2 採点上起こった事項とその処理

■技の認定について

- ・交差横移動技において、脚部が馬体に乗る実施は不認定とした。
- ・グループⅡ/Ⅲの技において、次の技に続けずに落下した場合は不認定とした。
- ・フロップ/コンバイン技において途中で落下した場合は不認定とした。
- ・両把手での横向き旋回から片手を馬端に下ろして倒立し、反対の馬端に移動しながら270°ひねる下り技は、開始位置が馬端でないことから、3部分移動としては認めずB難度技として判定した。
- ・両把手での横向き旋回から片手を馬端に下ろして倒立し、反対の馬端に移動しながら180°ひねり、さらにあん部馬背で270°ひねる下り技は、馬端倒立1回ひねり下りとしてC難度技として判定した。
- ・倒立下りで倒立位の逸脱が45°を超えた実施や、倒立の際に肘が深くまがった実施、倒立に持ち込む際に著しく停滞した実施は不認定とした。

■Eスコアについて

- ・縦向き3部分移動技において、角度逸脱がみられたものは両手を着く位置のずれを見て減点した。
- ・倒立技に持ち込む際に力を使用した実施は中欠点から大欠点の減点とした。
- ・旋回でバランスを崩して膝がまがったり馬体に脚が接触したりした場合は1周毎に減点した。

3 その他特記事項・意見・感想等

予選 【 259 演技 】		決勝 【 85 演技 】	
Dスコア 最高	5.8	Dスコア 最高	5.7
Eスコア 最高(7技以上)	8.533	Eスコア 最高(7技以上)	8.500
Dスコア 平均	3.4	Dスコア 平均	4.2
Eスコア 平均	7.1	Eスコア 平均	7.5
落下者数	79名	落下者数	22名
1演技中2回以上の落下者数	23名	1演技中2回以上の落下者数	4名
交差倒立技の実施者数	7名	交差倒立技の実施者数	7名
技数不足(6技以下)でのND	22名	技数不足(6技以下)でのND	0名

あん馬は比較的落下が多い種目ということもあり、予選では約30.5%、決勝では約25.9%の落下となった。さらに、1演技中2回以上の落下も予選では23演技あり少し残念な印象を受けた。

あん馬にかぎらず、近年は減点箇所の詳細や認定の厳しさなどが目立つ中ではあるが、特に交差倒立技や倒立下りの実施が少なくなってきたように感じた。これも各校では最新の情報を踏まえて演技構成に入れるべきか悩まれている状況だと感じるが、成長過程である高校生は先を見据えて果敢に挑戦していただきたい。今後もDスコアの向上はもとより、常につま先・膝が伸びた状態で、足先が上下することなく安定した旋回で実施された演技を1つでも多く見られるよう期待したい。

1 採点上の打ち合わせ事項

- ・2022年版高等学校男子適用規則の確認。
- ・演技全体として美しさと強さを表現した演技を評価する。
- ・倒立や静止技で正確な姿勢と静止時間を評価する。
- ・安定感のある演技を評価する。
- ・力技の後に肘をまげて逆懸垂になる捌きは減点の対象。
- ・難度表にない姿勢での2秒以上の静止は減点の対象。

2 採点上起こった事項とその処理

■技の認定について

- ・静止技や力技で静止時間不足の実施は減点、静止が見られない実施は不認定とした。
- ・後方（前方）車輪倒立経過において倒立を経過していない実施はA難度として認定した。
- ・後方（前方）車輪倒立（2秒）において腰が90°を超えてまがった実施は不認定とした。
- ・け上がり十字懸垂、後ろ振り上がり十字懸垂を同演技内で実施した場合には一方だけを認定した。（特別な繰り返し）
- ・ホンマ十字懸垂において、ホンマの肩の位置が高い実施は十字懸垂のB難度のみを認定した。
- ・ヤマワキ、ジョナサンで回転の途中で支持が見られるような実施は不認定とした。
- ・中水平で肩の位置が高い実施は上水平で認定した。

■Eスコアについて

- ・倒立姿勢においてケーブルへの接触や姿勢不良は相応の減点をした。
- ・力技における角度の逸脱や肘のまがりは相応の減点をした。
- ・グループⅢの力静止技に持ち込む際の肘のまがりは相応の減点をした。
- ・静止技、力静止技における静止時間の不足が多く見られた。
- ・肘のまがりを求められていない技での肘のまがりが多く見られた。
- ・着地減点のある演技が多く見られた。

3 その他特記事項・意見・感想等

D難度以上の力技に対する加点があった演技は決勝85名中29名であった。昨年からすると若干少なくなった。最も加点が多かったのは0.3の2名であった。E難度の力技を構成した演技は12演技あり高度な技を実施する意欲を感じた。また、着地に対する加点があったのは、決勝で17名、予選（259名）では15名であった。

全体的には、一つ一つの動きを「技」として表現する選手と、単なる「動き」として表現する選手との差を感じた。また、倒立や倒立に持ち込む際のケーブルへの接触や力技の弱さを感じる演技が多く見られた。Dスコアを上げるためには技の実施は不可欠ではあるが基本の倒立が不安定だと高得点には結びつかない。力技においても2秒の静止が求められているが、静止時間不足で0.3、静止なしで0.5の減点で不認定という実施も多く見られた。コロナ禍で思うように練習時間が確保できていないのも大きな要因の一つだと考えられる。力は短時間で身につくものではないので今後のトレーニングで時間をかけてケーブルに触れることなく正しい姿勢で実施できるように克服してもらいたい。

高校適用規則で着地に対する加点が設けられている。しかしながら着地に対する意識が弱いように感じた。着地が一番の高難度という意識をもってもらいたい。また、今回非常に気になった点は、演技開始前のアップ時間の長さである。1人30秒のアップ時間が設けられているが、多くのチームが演技開始のアナウンスが流れる頃に個人の1人目がアップをしている状態であった。アップの最中にケーブルが絡まることもあるため多少の時間オーバーは仕方ないにしても今一度ケーブルが絡まることも想定してのアップの仕方を考えていただきたい。

1. 採点上の打ち合わせ事項

- ・2022年版高等学校男子適用規則の確認
- ・雄大な跳越、および着地準備局面を示し、腰が高い位置での着地を評価する。
- ・第1局面、着手、第二局面、着地の減点の確認

2. 採点上起こった事項とその処理

■技の認定について

- ・伸身カサマツにおいて腰のまがりが見られた実施は伸身として判定した。
- ・伸身ツカハラにおいて腰が45°を超えてまがった実施は屈身ツカハラとして判定した。
- ・問合せは伸身ツカハラの認定について1件、ND（ライン減点）について1件の計2件だった。

■Eスコアについて、以下の実施に留意して減点をした

- ・第一局面での脚の開き
- ・着手の際の倒立姿勢
- ・第二局面での姿勢、膝、つま先の減点
- ・着地までの準備局面、着地姿勢、ひねり不足
- ・着地

3. その他特記事項・意見・感想等

昨年大会の決勝においてDスコア5.6の跳越技を実施した選手は4名であったが、今年は6名の選手が実施し、いずれも素晴らしい実施であった。特に、ルー・ユーフは、日本人でも実施する選手がおらず、高校生で実施する技術の高さに驚いた。決勝における跳越技の分布は以下の通りである。

■決勝出場者85名における跳越技の分布

Dスコア	実施数	跳越技と実施数
5.6	6名	ルー・ユーフ(1名) ヨー2(1名) ロペス(4名)
5.2	20名	ドリッグス(19名) ローチェ(1名)
4.8	28名	伸身ユルチェンコ2回ひねり(1名) ロウ・ユン(2名) アカピアン(25名)
4.4	16名	伸身ユルチェンコ1回半ひねり(1名) 伸身カサマツひねり(15名)
4.2	12名	伸身カサマツ(12名)
3.8	3名	伸身ツカハラ(3名)

優勝はロペスで着地を止めて15.100 [D5.6,E9.500] であり、2位は(ロペス)14.900 [D5.6,E9.400,ND0.1]、3位は(ヨー2)14.866 [D5.6,E9.266] という結果であった。また、決勝で着地を止めた選手は8名(伸身カサマツ3名、伸身カサマツひねり2名、伸身ユルチェンコ2回ひねり1名、アカピアン1名、ロペス1名)いた。Dスコアの高い技でも着地を止める選手が増え、習熟度の高さを感じた。着地に関していえば、予選決勝を通して、着地を止めたにも関わらずポーズの際に片脚を上げて踵を揃える実施が散見され、減点の0.1そして、加点も与えられないという状況になった。着地の脚の揃え方については再度確認してほしいと感じた。

全体的な感想として、ツカハラ系の第一局面で脚が揃っている実施が多かった。Dスコア4.8以上の実施においても揃えている選手が多く、第一局面での減点を極力減らそうという意識が強く感じられた。しかし、少数ではあるが脚を大きく開いている実施(0.5相当)もあり、着地がまとまってもEスコアが伸びなかった演技もあり、ツカハラ系を実施する選手は意識をして練習してほしいと感じた。Dスコアが4.8未満の跳越技でも、減点箇所を意識し、雄大な跳越を実施する選手が数名おり、9点台のEスコアが出ていた。今後もEスコアを意識しつつ、Dスコアの高い技へのレベルアップを目指してほしい。

最後にマナー・モラルについて、跳馬を直接濡らす行為や助走路でのアップ等をする選手はいなかった。挨拶についても大きな声で挨拶が行われており、跳馬に関してはマナー・モラルの面では、素晴らしい対応であったと感じた。指導者の方に感謝し報告とする。

1. 採点上打ち合わせた事項

- ・2022年版高等学校男子適用規則の確認
- ・評価すべき演技の確認

肘を一切まげることなく正確な倒立位を表現し、腰高で雄大な終末技を行った演技を評価する。

D スコアについて

- ・静止技において静止がみられない実施は不認定となる。
- ・支持や倒立で完了する技において、90°以上肘がまがる実施は不認定となる。

E スコアについて

- ・前振り上がりにおいて、背中が水平より低い実施は減点となる。
- ・終末局面が倒立位の技においての角度逸脱による減点は厳密に行う。
- ・後ろ振り倒立において、力を使ったり、腰をまげて倒立に持ち込んだりした場合、厳密に減点を行う。
- ・静止技における静止時間の不足については厳密に判定する。

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・「後ろ振り倒立(2秒)」や「伸腕屈身開脚力倒立(2秒)」において静止がみられない実施は不認定とした。
- ・「ティップルト」において、脚がバーの上ののった実施は不認定とした。
- ・「後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持」や「ヒーリー」の支持局面で大きく肘のまがった実施は不認定とした。

3. その他特記事項・意見・感想等

着地について良い傾向が見られた。1歩(1hop)以内で着地をまとめた演技が約88%であった。今後さらにトレーニングをし、雄大で腰高かつ安定した着地が増えることを期待したい。

最も改善すべき点は静止技である。「脚前挙支持(2秒)」「後ろ振り倒立(2秒)」「伸腕屈身力倒立(2秒)」において、静止時間が2秒に満たない実施が非常に多くの選手にみられた。その秒数に関わらず静止時間が2秒に満たない場合は0.3の減点であり、静止が見られない場合は0.5の減点である。各校で通し練習をする際、全ての静止技において静止時間を計測し、確実に2秒以上静止しているか必ず確認をしてほしい。また、「前振りひねり倒立」「ディアミドフ」「棒下宙返り倒立」において、減点のない実施がほぼ見られなかった。種目の特性上、これらの技において肘をまげず正確な倒立位に収める事が、高いEスコアに直結するため、今後の強化に期待したい。

最後に、マナーについて良くない事例が散見された。

- ・演技者が着地し挨拶を終える前に、次の選手がマットに上がって器械の準備をする。
- ・4名以上がマットに上がって器械の準備をする。
- ・指定された場所以外に炭酸マグネシウム、霧吹き、はちみつなどを置いたままにして演技を始める。

すべての選手が同じ条件で平等に演技できる環境を整えるため、これらのマナー違反については指導者に強く改善を求める。

1. 採点上の打ち合わせ事項

- ・2022年版採点規則、および2022年版高等学校男子適用規則の確認。
- ・理想的な演技についての確認（雄大な手放し技・膝つま先の意識・腰高の着地姿勢）。
- ・準備局面を有し、意識的に止められる終末技の評価。
- ・A難度技における正しい実施についての確認（ぬきの膝など）。
- ・力を使う実施についての減点（チェコ式車輪・エンドー）
- ・演技開始時の3回を超える振り出しについての減点。

2. 採点上起こった事項とその処理

■技の認定について

- ・ヤマワキにおいて、明らかな腰のまがりの見られた実施や、伸身姿勢の表現が乏しい実施はB難度（ボローニンまたは後ろ振り上がり上向きとび越し懸垂）として判定した。
- ・伸身トカチェフにおいて、明らかな腰のまがりの見られた実施は、C難度（屈身トカチェフ）として判定した。
- ・後方伸身2回宙返り1回ひねり下りにおいて、全経過大きく腰のまがりの見られた実施はC難度（後方屈身2回宙返り1回ひねり下り）として判定した。

■Eスコアについて

以下の実施において厳密な実施減点とした。

- ・手放し技において、バーを握る前に身体の伸ばしが不十分な捌きや、膝のまがった実施、身体が歪んだまま懸垂になる実施。
- ・手放し技の後の車輪における肘まがり。
- ・手放し技や終末技の前の車輪の膝まがり。
- ・車輪での単純な横への手のずらし。
- ・け上がりやエンドーの停滞。

3. その他特記事項・意見・感想等

決勝におけるDスコアの最高は5.4、Eスコアの最高は8.533であった。終末技において、着地の止まった判定をした演技は30演技（すべてD難度以上）であった。全体としても非常に高い着地への意識を感じた。

Dスコアについて、手放し技の種類は、上向きとび越し・ボローニン・マルケロフ・ヤマワキ・開脚トカチェフ・屈身トカチェフ・伸身トカチェフ・デルチェフ・屈身イーガー・伸身イーガー・コバチ・コールマンであった。組み合わせ加点について、トカチェフ+ギンガーにより0.1加点を獲得したのが1例あり、アドラーひねり+コバチの実施例は落下のため認定されなかった。チェコ式車輪の実施が増加していると予想したが、全体で9例にとどまった。

Eスコアについて、開脚トカチェフの切り返しが不十分で、その後の車輪で肘をまげるケースが多く見られた。閉脚シュタルダーおよび閉脚エンドーにおいて、ほとんどの実施でバーに足が触れるもしくはぶつかっていた。クーストの実施が少なく、捌きも不明瞭であった。終末技の伸身2回宙返り1回ひねり下りで腰がまがるケースが多発していた。

全体的にDスコアを上げるために多くの技に取り組むのではなく、技数の少ない演技構成でEスコアを狙う選手が多かった。それでもなお、高いDスコアの選手がEスコアでも評価されており、適正な評価ができたと感じている。しかしながら、技のバリエーションはさほど多くはないので、今後は多様な技に挑戦して欲しい。同時に、基本技術における姿勢欠点の確認も日々のトレーニングで改善して欲しいと感じた。